

ISSN 2186 – 3989

北陸大学経済経営学部における
学生の現状に関する一考察

篠原 史成、斎藤 英明、田部田 晋

A Study on the Present Situation of Students in the Faculty of
Economics and Management, Hokuriku University.

Fuminari Shinohara, Hideaki Saito and Shin Tabeta

北 陸 大 学 紀 要
第58号(2025年3月)抜刷

北陸大学経済経営学部における 学生の現状に関する一考察

篠原 史成^{**}、斎藤 英明^{*}、田部田 晋^{*}

A Study on the Present Situation of Students in the Faculty of
Economics and Management, Hokuriku University.

Fuminari Shinohara^{**}, Hideaki Saito^{*} and Shin Tabeta^{*}

Received December 23, 2024

Accepted December 25, 2024

抄録

本研究では、学生の現状に対する満足、不満足に着目し、北陸大学経済経営学部の学生の自己評価の自由記述から、学生たちがどのような現状に満足しているのか、どのようなことが不満足なのかということを明らかにすることを目的としてアンケート調査を行った。その結果、現状に満足している要因として「好き」や「できる」、「楽しい」、「友達」という言葉がキーワードとなっていることが明らかとなった。現状に不満足である要因として「苦手」や「できる」、「しまう」、「多い」という言葉がキーワードとなっていることが明らかとなった。こうした結果から、現状に満足している学生の特徴として、「友達が多い学生」や「人との関わりに苦手意識がない学生」が多いことが示唆された。次に、現状に不満足である学生の特徴として、「講義の内容、課題の多さに対応しきれずネガティブな感情になってしまう学生」や「人とのコミュニケーションに苦手意識があり、グループワークなどの活動に上手く参加できない学生」が多いことが示唆された。以上のことから、学生が現状に満足するためには、安心して友達（人）との関わりをもてる環境づくりが重要であるということ、成功体験を与えることができる講義内容、課題づくりを意識することで、学生が自信をもって何事にも取り組めるように意識づけする必要があると考えられる。

キーワード：自己評価、満足感

* 北陸大学経済経営学部 Faculty of Economics and Management, Hokuriku University

**責任著者 篠原史成 Fuminari Shinohara f-shinohara@hokuriku-u.ac.jp

はじめに

文部科学省（2024）によると、令和 5 年度における大学の中途退学者は 53,470 人であり、令和 4 年度と比べて増加した。また、学生の中途退学の理由として「転学・進路変更等」が全体の 22.0%、「学生生活不適応・修学意欲低下」が全体の 16.5%となっていた。さらに、学生の休学者は全学校種において令和 4 年度と比べて増加した。休学の理由として「海外留学」が全体の 13.7%、「精神疾患」が全体の 12.6%、「経済的困窮」が全体の 11.9%となっていた。北陸大学経済経営学部においても、中途退学者数および休学者数は高い傾向となっており、特に中途退学者数を減少させることは大学の経営にも関わる重要な課題である。また、武蔵ら（2016）は、普通に大学に通っているものの、対人関係面や学習面などで意欲低下の状況が現出している学生も存在すると指摘し、大学生が大学へ適応するためには、「学習面」と「対人関係面」の 2 側面の充実を意図した心理教育的援助サービスの充実が必要であると述べている。

本研究では、北陸大学経済経営学部が抱える中途退学者数の課題を解決するために、まずは学生が現状に満足しているのか、現状に不満足なのかということを調査した。また、その理由を自由記述させ、自己評価における個別具体的自己（溝上、2008）を考察することで学生の現状を把握し、今後の学生に対する取り組みに反映させていくことを目的とする。

方法

1. 対象とする授業

対象とする授業は、北陸大学経済経営学部で開講されているキャリアデザイン 2 および、キャリアデザインⅡのキャリア科目群の授業とした。

2. 研究対象者

対象とする授業を受けている北陸大学経済経営学部に所属している学生 127 名（1 年次生：52 名、2 年次生：73 名、3 年次生：2 名）とした。

3. 計測項目

アンケート（図 1）は、溝上（1999）を参考に「私は、全体的には自分自身に満足しています。」という問いに対して「はい／そう思います」、「いいえ／そう思いません」のどちらかを回答し、その後、満足している理由と不満足の原因をそれぞれ並列的に自由記述で回答させるものとした。なお、アンケートは対象とする授業の活動内容の一部として実施した。

4. 分析

自由記述の分析として、名詞、動詞、形容詞ごとの頻出語の抽出と抽出後における共起ネットワーク分析を行った。分析では、まず初めに形態素解析により単語単位に分解し、品詞ごとの頻出語を抽出した。形態素解析は、オープンソース形態素解析エンジンである MeCab（2013）を使用した。次に、共起の程度が強い抽出語を線で結んだネットワーク図である共起ネットワーク分析を行った。共起の程度は、佐々木ら（2006）および榊ら（2007）を参考に単語間の共益関係を示すものとして広く利用されている Jaccard 係数を使用した。

本研究では、出現頻度 4 以上の語で、Jaccard 係数を 0.12 以上に設定して共起ネットワークを抽出した。

【D-1】 私は、全体的に自分に満足しています。(当てはまるほうに○を記入してください。)	
<input type="checkbox"/>	はい / そう思います
<input type="checkbox"/>	いいえ / そうは思いません

【D-2】 あなたは、どのような点において全体的に自分自身に満足していますか。

.....

【D-3】 【D-2】と回答したのはなぜですか。

.....

【D-4】 【D-3】と回答したのはなぜですか。

.....

【D-5】 【D-4】と回答したのはなぜですか。

.....

【D-6】 【D-5】と回答したのはなぜですか。

.....

【D-7】 あなたは、どのような点において全体的に自分自身に満足できていませんか。

.....

【D-8】 【D-7】と回答したのはなぜですか。

.....

【D-9】 【D-8】と回答したのはなぜですか。

.....

【D-10】 【D-9】と回答したのはなぜですか。

.....

【D-11】 【D-10】と回答したのはなぜですか。

.....

図 1 アンケート

結果

現状に満足している学生は 35 人、不満足である学生は 92 人であった。

学生から得られた 830 (満足：427、不満足：403) サンプルの自由記述データ全文を対象に形態素解析を行った。抽出語の合計は、9078 語 (満足：4560 語、不満足：4518 語)、1 サンプルあたり約 10.9 語 (満足：約 10.7 語、不満足：約 11.2 語) であり、短い文章で記述されている。品詞 (名詞、動詞、形容詞) ごとの頻出頻度の高い上位 30 語は表 (満足：表 2、3、4 / 不満足：表 5、6、7) の通りである。

また、自由記述で用いられた語句がどのような関係で使用されているのかを共起ネットワーク分析を使用して可視化した (図 2、3)。なお、共起ネットワーク分析の円の大きさは単語の頻出頻度を表しており、線は共起を表している。

表 1 学生の現状（満足／不満足）

学年	満足（人）	不満足（人）
1	18	34
2	17	56
3	0	2
総計	35	92

表 2 出現回数（満足-名詞）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
好き	22	バイト	8	苦手	5
生活	22	私生活	7	心	5
満足	17	授業	7	野球	5
大学	17	学校	7	趣味	5
友達	17	仕事	7	経験	5
課題	12	自身	7	高校	5
充実	11	目標	7	活動	5
将来	9	能力	6	練習	5
コミュニケーション	9	健康	6	自信	5
行動	9	勉強	6	周り	4

表 3 出現回数（満足-動詞）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
できる	54	行く	7	つながる	4
思う	26	くる	7	つく	4
考える	12	出る	6	知る	4
取り組む	11	入る	5	頑張る	4
いく	10	出来る	5	使う	3
感じる	9	やめる	5	忘れる	3
わかる	9	送れる	4	取る	3
言う	9	しまう	4	もつ	3
くれる	8	合う	4	行う	3
生きる	8	通う	4	関わる	3

表 4 出現回数（満足-形容詞）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
楽しい	18	明るい	3	きつい	2
多い	14	やすい	3	すごい	2
いい	13	忙しい	2	難しい	1
良い	9	暗い	2	はやい	1
新しい	5	たのしい	2	やさしい	1
少ない	5	面白い	2	上手い	1
深い	5	優しい	2	せつない	1
うまい	4	高い	2	速い	1
悪い	4	小さい	2	幼い	1
よい	4	広い	2	めんどくさい	1

表 5 出現回数（不満足-名詞）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
苦手	20	部分	9	課題	6
自信	15	後回し	9	仕事	6
生活	12	将来	8	嫌い	5
行動	12	集中	8	グループ	5
能力	10	社会	7	意見	5
満足	10	計画	7	失敗	5
勉強	10	相手	7	必要	5
経験	10	人見知り	6	回答	5
大学	9	物事	6	バイト	5
コミュニケーション	9	性格	6	地域	5

表 6 出現回数（不満足-動詞）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
できる	51	言う	7	出す	4
しまう	51	出る	6	終わる	4
思う	27	すぎる	6	使う	4
考える	17	なれる	5	聞く	3
話す	9	つく	5	避ける	3
わかる	8	伝える	5	話せる	3
感じる	8	決める	4	取り組む	3
いく	8	行く	4	進める	3
くる	8	困る	4	知る	3
分かる	7	足りる	4	行う	3

表 7 出現回数（不満足-形容詞）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
多い	15	やすい	3	新しい	2
いい	7	低い	3	少ない	2
めんどくさい	6	深い	3	無い	2
甘い	6	めんどい	3	男らしい	1
弱い	5	良い	3	遠い	1
悪い	5	楽しい	3	面倒くさい	1
うまい	5	よい	3	欲しい	1
上手い	5	だるい	2	重い	1
遅い	5	新しい	2	速い	1
怖い	4	少ない	2	早い	1

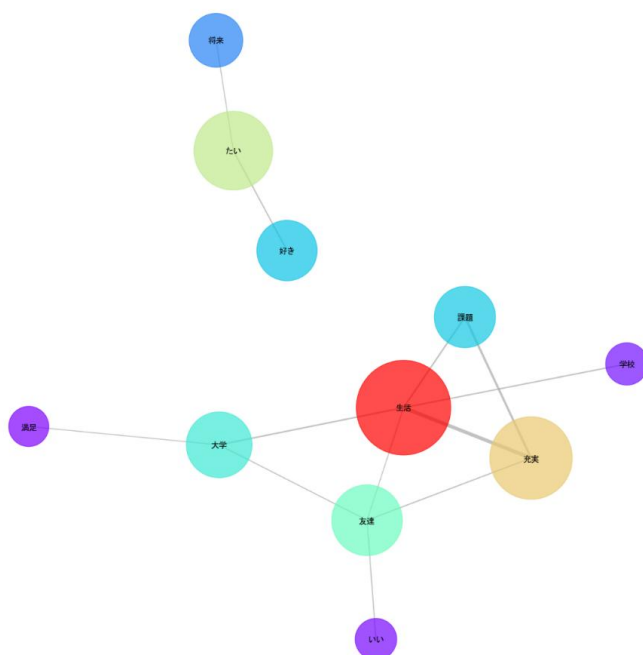


図 2 共起ネットワーク（満足）

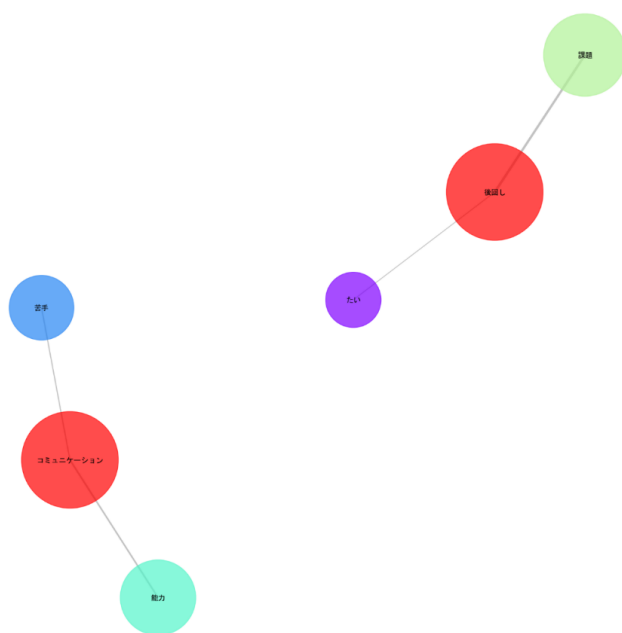


図 3 共起ネットワーク（不満足）

北陸大学経済経営学部の学生が、現状に満足している要因として「好き」や「できる」、「楽しい」、「友達」という言葉がキーワードとなっていることが明らかとなった（表2、3、4）。また、自由記述の詳細を見ると「好きなことは集中して取り組める」や「課題を一つ一つクリアし、しっかり提出することができる」、「努力できる環境」、「新しい知識、情報を得ることができて楽しい」などという記述があった。さらに、図2の結果から、「将来」と「たい」、「好き」に共起性があり、「生活」と「充実」、「課題」の共起性が強いことが明らかとなった。次に、現状に不満足である要因として「苦手」や「できる」、「しまう」、「多い」という言葉がキーワードとなっていることが明らかとなった（表5、6、7）。また、自由記述の詳細を見ると「人との関わりが苦手」や「意見や考えを伝えることが苦手」、「できる範囲を超えている」、「できる自分の将来像にたどり着けない」、「ネガティブになってしまうことが多い」などという記述があった。さらに、図3の結果からは「課題」と「後回し」の共起性が強く、「苦手」と「コミュニケーション」、「能力」に共起性があることが明らかとなった。

考察

アンケート調査の結果から、現状に満足している学生の特徴として、「友達が多い学生」や「人との関わりに苦手意識がない学生」が多いことがわかった。この学生たちは、講義や課題、部活動、アルバイトなどが忙しくとも、その状況を楽しむことができることが多く、自分の将来のため、好きなことのために大変なことを乗り越えることが満足感や充実感に繋がっているのではないかと考えられる。次に、現状に不満足である学生の特徴として、「講義の内容、課題の多さに対応しきれずネガティブな感情になってしまう学生」や「人とのコミュニケーションに苦手意識があり、グループワークなどの活動に上手く参加できない学生」が多いことがわかった。この学生たちは、課題解決に対する諦めが早く、自分の行動に自信がもてないことで、主体性が失われていることが多いようである。その結果、何においても自分自身に自信がもてなくなってしまう、現状に満足できないということに繋がっているのではないかと考えられる。

以上のことから、小城ら（2019）の「学業満足」が低下しても、代わりに「交友満足」が上昇することによって大学への適応が維持されると見られるという報告にもあるように、学生が現状に満足するためには、安心して友達（人）との関わりをもてる環境づくりが重要であると考えられる。また、成功体験を与えることができる講義内容、課題づくりを意識することで、学生が自信をもって何事にも取り組めるように意識づけすることが必要であると考えられる。そうすることによって、現状に満足する学生が少しでも増えることで、本学の課題となっている中途退学者を減少させることができるのではないかと考える。しかしながら、今回はアンケートの回収が出来た学生の総数が少なかったため、今後は調査の範囲を広げて調査を行い、より正確な学生の現状を明らかにする必要があると考える。

なお、本研究は北陸大学特別研究助成を受けたものである。

参考引用文献

- 文部科学省. (2024). 令和 5 年度 学生の中途退学者・休学者数等に関する調査結果（令和 5 年 6 月 28 日公表）
Available at: https://www.mext.go.jp/content/20240627-mxt_gakushi01-000013028_1.pdf (Accessed: 23th December 2024).
- 武蔵由佳, 河村茂雄. (2016). 大学生における学校生活意欲との関連. 教育カウンセリング研究, 7 卷 1 号, 35-44.
- 溝上慎一. (2008). 『自己形成の心理学 他者の森をかけ抜けて自己になる』世界思想社.
- 溝上慎一. (1999). 『自己の基礎理論: 実証的心理学のパラダイム』金子書房.
- MeCab, "Yet Another Part-of-Speech and Morphological Analyzer",
2013.<http://taku910.github.io/mecab/>
- 佐々木靖弘, 佐藤理史, 宇津呂武仁. 関連用語収集問題とその解法. 自然言語処理, Vol.13, No.3, pp.150-175, 2006.
- 榊剛史, 松尾豊, 内村幸樹, 石塚満. Web 上の情報を用いた関連語のシソーラス構築について. 自然言語処理, Vol.14, No.2, pp.3-31, 2007.
- 小城英子, 畑中美穂, 川上正浩. (2019). 大学生活充実度の変化 大学での学業遂行と適応を支える心理的特性. 日本心理学会第 83 回大会